自分の生きる場所

武装ネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
自分の生きる場所

【Ｎコード】
Ｎ６４７１Ｐ

【作者名】
武装ネコ

【あらすじ】
朝に幼なじみに起こされ、幼なじみと登校し、幼なじみと昼食を食べて幼なじみと下校する。
そんな「なにかのゲームか小説か？」という、健全な男なら一度は夢見る生活を送っていた澤村。

しかしある日、友達の馬場と一緒に異世界に飛ばされてしまう。
その世界は自分たちの居た世界と同じように、空には飛行機が飛び、道路では車が走る世界だったのだが、どこか違和感がある世界。

その世界で出会う藤林と、そのクラスメイト達と繰り広げていくストーリー。

普段の生活

俺はうるさい音で目を覚ます。

目覚まし時計が鳴っている。

閉められていたはずのカーテンが開けられていて、窓からさんさんと光が指し込んできていて眩しい。

俺は手で目を擦り、目覚まし時計に手を伸ばして音を止めようとした。

まだ俺は眠いんだ、もう一眠りしたいんだ、と。

しかし目覚まし時計は設定した時間より早い時間を指している。

鳴ってはいない。

鳴っているのは目覚まし時計じゃなくて、俺の幼なじみの桑林　聡美の声だった。

「早く起きなさいよ俊助！もう起きる時間でしょ！」

「う～ん…」

この聡美とは、初めて会った時の事を覚えていないくらい昔からの付き合いだけど、別にこいつと俺は何の関係もない、ただの幼なじみだ。

なかなか整った顔をしているが、気が強い性格で髪型がショートカットのボーイッシュな女である。

感謝はしているけど、さすがに目覚まし時計が鳴る前に来られては迷惑だ。

まったく、まだ寝られる時間があるんだから寝かせてほしいもんだよ。

だから俺は、再び毛布に潜り込んで二度寝をしようとした。

――が、聡美の馬鹿力でベッドから叩き落とされる。

「起きなさいって言ってるでしょ！
せっかく私が起こしに来てあげてるのに！」

「ちぇ、まだ時間あるから寝てていいのに。
だからもうちょっと寝かしてくれよ聡美。」

「だめ、早く行きなさい。早起きは三文の得でしょ？」

背中をゲシゲシ蹴ってくるので仕様がなく立ち上がる。

本当に暴力的な女だ。
こいつももう少し優しくなればモテるのに、と思いながら俺はしぶしぶ部屋を出て、階段を下りていった。

「お前、それ自慢してんの？」

しかし、学校で友達にこの事を話すといつもこんな事を言われる。
幼なじみの女の子に起こしてもらえるなんてうらやまし過ぎると言われる。

そう言うなら、誰か俺と変わってほしいよ。

俺はもううんざりしているのにさ。

「まったく…自慢じゃねぇよ。
愚痴るつもりで言ったんだよ。」

「どんな幸せもんだよ澤村。
アニメとかギャルゲーでしか有り得ないと思ってたぞそんな事。
それを嫌がるなんて、どういう神経してんの？
ホントに男かよ、お前。」

「うるさい、お前の場合は逆に性欲に素直過ぎだ馬場。」

こいつ、馬場　琢磨はまぁ、俺の友達だ。
癖のある髪が特徴で、こいつも聡美と同じくうるさいヤツだ。
高一の時に席が隣になり、それ以来、高二に上がってもこうして話をしにやってくるんだ。

そしてこいつは、聞いての通りのスケベで、女に目がなくて自分のハーレムを作る事を本気で夢見ている。
顔は悪くないが、こいつの性格だと一生無理だろう。
まぁ、俺も高校二年生にもなってまだ女子の話し相手は聡美ぐらい

しかいないのだが。

「でもさ、お前まだ彼女いないんだろ？」

「いないけど…」

「そしたら一緒に頑張って可愛い彼女作ろうぜ！
あっ、お前は桑林な。」

「なんで聡美なんだよ！」

俺は強くそう言うが、馬場は変わらずニヤニヤ笑っている。

「いいじゃん。お前、聡美の事が好きなんだろ？」

「誤解を招くような事を言うなよ！
俺は別に聡美が好きな訳じゃないんだよ！」

「嘘だろ？ホントは好きなんだろ？桑林の事がさ。」

んなわけないじゃん、あいつはただの幼なじみだっつの。

そう思って俺は口を尖らせてそっぽを向いた。

すると馬場はため息をつきながら、可哀想な桑林、と呟いた。

聡美が俺の事を好きみたいに言うなよ。

そんな訳ないじゃんか。

俺はそう思って、頬杖をつきながらあくびをした。

――――――――――――――――――――――――――――

４時限目。

この時間の終盤は皆、そわそわしている。

クラスに必ず一人は貧乏揺すりが激しい人がいるだろう。

俺のクラスにもそんなやつがいるのだが、４限目の終わりになると更に激しくなる。

俺は貧乏揺すりをする癖をもっていないのだが、気付くとこの時間はペン回しが激しくなっている。

みんな考えていることは同じだ。

できれば早く授業が終わってほしい、そう思っている。

鐘が鳴る一分前。

隣のクラスの授業は早めに終わったようで、廊下を走る音が聞こえてきた。

クラスメイトの眉間にはシワが寄る。

３０秒前。授業はまだ終わらない。

ダメだ、隣のクラスにもう既にかなりの差をつけられている。

授業はちょうど、切りよく終わりそうだがこのままでは間に合わない。

そうして俺は手に汗を滲ませていると、前の席の馬場と目があった。
俺たちの席は廊下寄りだ。
すぐに廊下に出れるが、こいつとの差はほとんどない。
こいつには、負けたくない。

時計の針が、かち…かち…と、まるで俺たちの脳に響かせるように鳴っている。
あと5秒、4秒、3…2…1…

「うりゃぁぁあー！！」

そして俺たちは鐘と同時に走り出した。
俺も馬場も、うおぉぉと走って廊下に出た。

目的地は全員同じ、一階のある場所だ。
俺たちも急いでその場所に向かうけど、さっきのスタートまでの差

が大きく、俺はこれでは間に合わない、と焦り始めた。

だから、普通は階段を降りてから回り道をしないといけないのだが、俺は普通とは違う手を打つ事にした。

「だりゃぁああ！」

「澤村？！」

俺は開けてあった窓から飛び出して中庭の空を飛んだ。

飛び出した瞬間、あまりの高さに弱気になるがもう遅い。

俺は足で着地し、体を回転させて受け身をとった。

足がじんじんと痛むけど、二階からだったので何とか無傷…ショートカット成功だ。

勝ち誇るように俺が飛び出した窓を見てみると、馬場は悔しそうに俺を見ていた。

「じゃあな～！お先、馬場！」

「くぅぅ…負けるかぁあ！！」

俺が馬場を置いて先を急ごうとすると、なんと馬場も窓から飛び出てきた。

着地して、受け身をとる。

こ、こいつ…本気だ…

「ちぃ…うおぉ！」

馬場の本気は俺を更に本気にさせた。

こいつにだけは負けたくなくて、全力疾走で走り出した。

二階から飛び下りたお陰で人はさすがに前にはほとんど人がいなかった。

前の人達と少し離されてしまっているが、本気の俺たちはすぐに距離を詰め、抜き去る。

残った、そのほとんどの人を、全力で追いかけて全力で抜き去った。

きっと俺たちはすごい形相で走っていたに違いない。

抜いた人は誰しも俺たちに驚き、怯えたような顔していく。

でも俺たちは気にしなかった。本気だった。

目的地に着くと前には誰にもいなかった。

一番乗り、しかも馬場は俺の後ろだ。勝った！

しかし、馬場は諦めなかった。

くそう、と叫ぶと五百円玉を持った手を振り上げたのだ。

「おばちゃーん！
カツサンドとカスタードパァーン！！」

そして投げた。おばちゃんに向かって。

「なにぃいい？！」

しかし―。

ベシン！

「お金は投げてはいけはせんよ？」

パン売り場のおばちゃんは厳しかった。

にっこり、営業スマイルを浮かべながら、馬場が投げた五百円玉を振り払ったのだった。

そして俺がゴール…

「はぁ、はぁ……ふっ、今日は俺の勝ちだな。」

「ぐはぁあぁあ！」

今日のレース結果。

1位　澤村　俊助
2位　馬場　琢磨
ちなみに馬場は五百円玉を紛失…

「あんた達バカじゃないの？」

クラスに帰ってからの聡美からの一言。
隣のクラスなのに何故かここで弁当を広げている。

「窓から飛び出すなんて…足折ったりしたらどうすんの？！」

「でも、やる人はやるんだぞ？俺達以外にも飛び降りてた人いるしさ。」

「そういう人達と同じバカなの、あんたは?！」

「でもそうでもしないとすぐにパンがなくなっちゃうし…」

「そんな物の為に体張るの?！」

聡美は眉間にしわを寄せて怒鳴っている。

あんまり無茶するな、とは前から怒られてたけど、今日はかなり怒っているみたいだ。

窓から飛び降りるところを見られたのが失敗だったか…

次からは見られないように気を付けながら飛び降りなければ…

俺がそう反省（?）していると、馬場はにやにやしながら言った。

「…ねぇ、やっぱり桑林は
澤村のこと好きなんじゃないの?」

気付いてみると、既に喧嘩は俺と聡美だけになっていた。

周りを見渡してみるとクラスのみんなは俺たちを見てニヤニヤと笑っている。

どうせ、相変わらず痴話喧嘩が絶えないカップルだなぁ、とでも思っているのだろう。

いつも、付き合っていないと言っているのに。

でも、実際は俺も聡美は俺のことが好きかもしれない、と思っていた。

隣のクラスからわざわざ俺のクラスまでやって来て俺と一緒に食べる。

異性の間でこんな事をするのは彼氏彼女の関係にある人達だけだろう。

だからもしかしたら…と思っていた。

このままなら。

「えっ？そんなわけないじゃない。私が俊助を好きになるはずないでしょ。」

照れもない。

俺と同じように、慣れているようにすぐに答える。

やっぱり自分の気の所為だった。
有り得ないんだ、聡美が俺の事を好きだなんてさ。
聡美が俺のことを好きな訳ないよなぁ、俺って勘違い男？

こういう事は何回もあったんだ。
何回も、好きなのかもしれないと思い、それを破られている。
こうして俺達はずっと友達以上、恋人未満の関係を続けていた。

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――

「絶対好きだと思うんだけどなぁ…」

放課後、俺は馬場の自転車に二人乗りしながら帰っていた。
いつもは聡美と一緒に帰っているけど、今日は聡美は用事があるらしく、馬場と一緒に帰っている。

「なぁ…朝も聞いたけどさ…
お前、ホントに桑林の事好きじゃないの？」

馬場はやけに真面目な表情で訊いてきた。

馬場にとって、どうでもいい事のはずなのに、どうしてそんなにこの事が気になるんだろう。

でも、馬場にふざけている様子はないので、俺はもう一度心の中を覗いてみることにした。

―夏が終わり、秋に入り始めたので海から見える太陽はまだ少し高い。

今日はいい天気で、空は雲一つなくて青に染まっている。

俺の聡美に対する心はこんな感じだった。

心の壁がなく、打ち解けている素直な心。

長い間関わってきたからこそ、持てる心だ。

しかし温かくはない。

きっと長く一緒に居すぎて、側にいるのが当たり前と、心のどこかで思っているのだろう。

「そうだな、友達としては好きかな…
でも恋愛感情とかそういうのはない。
やっぱり、聡美はただの幼なじみだよ。」

「……そっか…そっか。」

海が見えてきた。

リアス式海岸の崖沿いの道を自転車が走る。

下り坂になってスピードも上がり、潮風が吹き付ける。

二人分の重みで更に自転車は加速していった。

「そういうお前は誰が好きなんだよ。」

「さぁ誰だろうかなー」

バギン！

「え…」

何かが前輪から落ちた。

それは地面を激しく転がってガードレールを越え、海へと落ちる。

前を向いて見ると、苦笑いしながら馬場は言った。

「ブレーキ…壊れた…」

「え……」

俺は青ざめた。

坂を下っている俺たちの目の前には、既に急なカーブがある。

馬場が急いでハンドルを切るけど、俺を後に乗せて、こんな速度で曲がれるはずがない。

海へと続くガードレールはどんどん迫ってくる。

曲がりきれずにどんどん近付いてくる。

無理だ…ぶつかる…！

ガシャァ！

俺たちは、ガードレールにぶつかって飛び越えたと思うと、海へと真っ逆さまに落ちていた。

手を伸ばしても、その手は虚しく空を掴む。

これから死ぬからか？

俺たちがぶつかったガードレールが、何だかゆっくりと遠のいていく。

「死」ってのはいきなりだな。

今日もいつも通りの日々を過ごすはずだったのに。

明日もまた聡美に起こされるはずだったのに。

俺は頭が真っ白になり、気を失った。

真っ逆さまに”その世界”に落ちていった。

新しい日々

しばらくして、俺は目が覚めた。

いつもの天井はなくて、真上には、雲のない真っ赤な空がある。

背中がやたらと冷たくて、起き上がって立ってみると、俺は予想もしない光景に驚いた。

ここは部屋やリビングではなく、広々としたどこかの公園だったんだ。

俺は今まで寝ていた場所は、公園のグラウンドだったんだ。

…そうか、俺たちは、道路からガードレールを突き破って…

でも変だな…

俺たちは海に落ちたはずなのに…

自転車のブレーキが外れ、速度が落とせずガードレールにぶつかって海に落ちたはずなのに…

それなのに、なんで俺たちは地面で寝ていたんだ?

それにこの場所は一体どこなんだ？

「馬場、馬場！起きろ！」

「…う～ん…あれ？なんで澤村が？」

「俺たち海に落ちたんだろ！ブレーキが壊れて海に！」

「何言ってんだよ澤村…
海に落ちたら公園にいるはずないだろ…」

そう言って馬場はバッと体を起こした。

そして不思議そうに辺りを見回す。

「何で公園の真ん中で寝てんの？！
プロレスでもやって気絶してたのか？！
いや…そういえば…確かに澤村の言う通り、俺たち海に落ちたんだった…！
ガードレールを突き破って海に落ちたんだ！

なのになんでこんなところにいるんだ?!」

「わからない…
俺もさっき目が覚めたんだけど、ここがどこだか全然わからないんだ。」

俺たちは土埃を払って立ち上がり、その公園を見て歩いた。
滑り台があり、鉄棒があり、ジャングルジムもあってテニスコート十面くらいの少し広い普通の公園だ。
ただ小さな休憩所があり、階段を上って上の階にいくと、町が見渡せる、コンクリートの展望台があるだけだ。
しかし、町を見渡せる展望台?

「海は…ずっとこの先だ。」

「それで俺たちが目が覚めて今いる場所は、町が見渡せるくらい高い場所にある公園、か…」

しかも太陽は今、海に沈もうとしている。

海に落ちる前は少し高い場所にあった。
だからつまり、海に落ちてから少ししか時間が経っていないという事だ。
その短時間の中でどうやってここにきたか、俺たちは全くわからなかった。

「不思議だらけだ…
ここがどこかもわからない。」

「携帯電話も使えないし……」

「帰ろうにも帰れないな…」

色々考えてみたけど、どうしようもない。
どの方法もうまくいく保証がない。
最悪の場合で警察に助けてもらう手も考えたけど、一体どうやったらこの出来事を信じてもらえるのだろう。

だから俺達は、展望台で町の景色を眺めながらこの不思議を考えていた。

眺めながら、立ち尽くしていた。

「すいません、誰かここに人が来なかったですか？」

そう立ち尽くしていると、そんな声がした。

後を振り向いて見ると、長くて癖のない黒髪の女生徒がいた。

「あれ…聡美…？」

「あれ…俊太郎…？」

「いや、見間違いか…」

「いや、見間違いだよね…」

初対面なのにいきなりハモった。

馬場は不思議そうに見る。

でも何だか雰囲気が聡美と似てたんだ。

暴力的とは真逆で、静かで大人しそうなんだけどさ。

「あ…えっと、俺たちも今、目が覚め…いや、来たところだからよくわからないな。」

「そうですか、ありがとうございます。」

女生徒は、コンクリートの立方体のベンチに座った。

どうやらここに来る、俊太郎という人を待っているらしい。

女生徒の来ている制服は紺色のブレザーの制服だ。

リボンと胸の校章のワッペンが地味さを逸脱させ、赤と紺の、チェックのスカートが可愛らしくさせている。

でもそんな制服、俺たちは見たことがなかった。

制服は、馬場の影響で地元の何校かの制服を知っているけど、全く知らない制服だった。

やっぱり、自分たちの地元の場所から相当遠く離れた場所らしい。

俺は、ある事を考えていた。

この人に、この場所の事をを訊いてみようと考えていた。
もう、何も知らない自分たちの頼りはこの女生徒しかいない。
地元であるこの人なら何か色々知っているはずだ。
俺と馬場は見合わせた。
考えている事は一緒のようだ。
俺達はこの女生徒に少し助けてもらうことにした。

「あの、ここはどこか教えてくれる？」

「ここ…ですか？
ここは上総町の、日ノ出公園ですよ。」
予想した通り、全く知らない場所だ。

「都道府県から教えてくれる？」

「とどうふ、けん…？
何ですか、とどうふけんって？」

「な…」

俺たちは驚いて言葉にならなかった。
別に馬鹿にしている訳じゃないけど、唖然として女生徒を見る。
「ほら！神奈川県とか東京都とかの！」
「神奈川県？東京都？？」
女生徒は全くわからないようで慌ててしまっている。
俺たちは呆気に取られて言葉が出なかった。
女生徒がおかしいのか、俺たちがおかしいのか…
「あの…お二人方はどうかしたんですか？
さっきも深刻な話をしていたようですけど…」
俺はこの出来事を説明するか迷った。
説明しても信じてもらえないかもしれない。

笑われるかもしれない。

しかし俺たちはこのままずっと
この上総町という街を彷徨う事になるかもしれない。

それはやっぱりダメだ。

もう、俺達はこの人に頼るしかない。

俺はこの女生徒に、この出来事を話す事にした。

「…信じられないかもしれないけど
話を聞いてほしい…」

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――

「それは…大変でしたね…」

俺はこの女生徒に、先程起こった事を全て話した。

普通なら馬鹿馬鹿しくて信じてもらえない話だけど、俺達の頼りはもうこの女生徒にしかなかった。

話すしかなかったんだ。

「やっぱり、信じられない？」

俺は、ダメ元で訊いてみる。

藤林は、すぐには答えずに黙って俺達の顔を真剣に見ていた。

俺達の目の奥、心の奥を感じ取るように。

そしてしばらく沈黙の時が流れると、女生徒はにっこり笑って言った。

「…いえ、私は信じます。

何となくあなた達が嘘をついているとは思えません。

悪い人にも見えませんし。」

「本当に？！」

俺はいい人だと思った。

信じてくれて逆にこっちが驚くくらい馬鹿げた話なのに、この女生徒は笑って信じてくれたんだ。

「泊まる家は見つかりましたか？」

「いや…まだだけど…」

「じゃあとりあえず、今日は私の家に泊まりましょう。」

「ええっ？！」

なんて心が広い人なんだ！

話を信じてくれただけでなくて、家に泊めてくれるなんて！

いやしかし、さすがにそこまでしてもらうのは悪い。

確かに俺は、この人に出来事を話し、助けを求めたかもしれないけ

ど、夕食を分けて下さいとか、シュラフを貸して下さいとか、些細な事を望んでいたんだ。

泊めてもらえるなんて本当にありがたいけど、やっぱり迷惑をかけてしまうのではないだろうか。

それに、この子はもう何の疑いもないのだろうか。

普通はもっと疑うと思うのだけど…

「い、いやでも…君は俺たちみたいな初めて会った知らない男たちを、自分の家に泊めてもいいの？」

「そうだよ…

泥棒かもしれないって思わないのかよ。」

「泥棒とか、そういう悪い人はこうやって遠慮したりしません。

泊まる家がないなら泊まっていってください。

いや、安心できるように、もう住んでください。」

俺たちは唖然とした。

なんだ？この人は天使か？

この世界にこんないい子がいるとは。

でも、勝手にこの子だけで決めてしまっていいのだろうか。

両親の迷惑にならないだろうか。

そんな事を懸念したけど、泊まらなければ俺たちは、野宿することになる。

秋に入り始めて段々と寒くなってきたこの時期に、この公園で眠る事になるんだ。

俺たちに遠慮をしているほど余裕はない。

とりあえず俺たちはこの人の家に行く事にした。

この人の両親との話もする為に。

「じゃ、じゃあ…お言葉に甘えて…」

「はい！

あの、お名前は？」

「あ…えーっと…」

「俺は馬場　琢磨。よろしくな！」

俺が口ごもっている間に馬場はウィンクして、藤林に露骨すぎるアピールをした。

「あ、はい。」

「えっと、澤村　俊助。」

「はい！
私は藤林　美郷です。」

——

「シクシクシク…」

「どうした馬場。」

「せっかく可愛くていい子だからアプローチしてみたのに、俺はなんか、邪魔者みたいに…」

「アプローチって…
ウィンクしただけだろうが…」

藤林　美郷か…確かに、可愛い子だったな…
優しくていい人だし。
馬場が気になるのもわかる気がする…

しかし俺は可愛い、いい人以外にも、違う点で気になる点があった。
普通でない何かが、引っ掛かっていた。

「おい澤村。お前は聡美って決まってんだからな。
美郷ちゃんには一切手ぇ出すなよ。」

「だからなんで聡美なんだよ！
…ってお前、藤林を狙ってんのか？！」

「へっへっへ…」

全くこいつは…
こんな事態に巻き込まれているって言うのに、よくそんな事を考えられるよな…

でも、心では藤林のことが気になっている自分がいた。
俺の心の奥で、肩より長い髪を揺らしながら、笑っている藤林がいた。

――――――――――――――――――――――――――――――
―――

「お風呂、ありがとうございました。」

「いえいえ。
そこで待っていてください。

もうすぐ夕飯ができますよ。」

藤林の母さんに言われて俺は食卓の座布団に座った。

藤林の家は中々裕福なようで、居間には机やテレビなどが余裕を持って置かれている。

床は懐かしい匂いを放つ畳で、ここから見えるキッチンは、襖を開けてダイニングキッチンみたいになっている。

キッチンで藤林のお母さんが、一つに結ばれた長い髪を揺らしながら夕飯の支度をする姿は、何故か懐かしくて昔の日本を感じた。

居間の人達に目を配ると、馬場と藤林のお父さんがテレビを見ていた。

藤林はまだ二階の部屋にいるようで、ここにはいない。

「なぁ、澤村…上総園ってどこかわかるか？」

「上総園？」

そうやって部屋を眺めて夕飯を待っていると、馬場は藤林の家族達に聞こえないようにひそひそと話しかけてきた。

「ここの地名の事らしいんだよ澤村。
ほら、見ろよテレビ。
俺たちが聞いたことがない単語ばかり言ってる。」

「ホントだ…」

「聞いてると通貨まで違うみたいだし、やっぱりここ…俺たちが知ってる場所、ていうか世界から違うよ。」

「世界から…？」

『皆さん、夕飯が出来ましたよー』

「は、はいっ！」

お母さんが両手に皿を持って居間に来たので、座布団に急いで座り直す。

黙って、食卓に並べられていく料理を見ていた。

でも、世界から違う、か…

確かにこの世界は色々とどこかが違うし、都道府県や金の単位の円もない。

それだけじゃない。

俺達の世界と、この世界で違うものが沢山あるんだ。

でもそうとなると一体ここはどこなんだろうか。

俺達は一体どこに迷いこんでしまったのだろうか。

「澤村さん、馬場さん。」

「あ…はい、なんでしょうか。」

料理を並べ終わったのか、藤林のお母さんが尋ねてくる。

「さっき、美郷から話を聞きました。

…不思議な事に遭ってしまったのですね。」

「…はい。」

俺は目を落として応える。

「あなた達は今、住む場所がないんですね？」

「はい。」

「面倒を見てくれる親は、側にいないんですね？」

「はい。」

「なら、二人とも無事に家に帰れるまでこの家で暮らしてください。私達が出来る限り面倒を見ますので安心して暮らしてくださいね。」

「…はい。ありがとうございます。」

「ありがとうございます…本当に。」

俺は少し、涙が出そうになった。

見ず知らずの子供にここまでしてくれるなんて…藤林家は本当にいい家族だ…

俺達は本当に感謝しなければならない。

感謝して、いつかこの家族に恩返しをしなければならないと俺は思った。

「おいおい美代子。
それは僕の台詞じゃないのかな。」

お母さんの隣の、眼鏡をかけて優しそうなお父さんが口を開く。

「あら、そうだったわね。
思わず亭主振りしてしまったわ。」

お母さんも笑って応える。

きっとこの二人は仲が良いんだなと、俺は思う。

「僕は美郷の父の和俊(かずとし)だよ。
こちらは女房の美代子(みよこ)。
二人とも、よろしくね。」

「よろしく、お願いします…」

俺達は揃って頭を下げた。

感謝を表すように深く、３秒くらい頭を下げていた。

頭を上げると、そこに藤林が入ってきた。

居間の入口に立っている。

そして、自分が食卓に着くのを待っているのだと気付くと、一言謝って少し慌てて俺の隣に座った。

でも、あれ？

何だか、藤林の表情が暗いような…

「じゃあ、食べましょうか。」

「うん、頂きます。」

そう言って、藤林夫妻は食事を始めた。

藤林も浮かない雰囲気で、箸を動かし始める。

俺は藤林の様子が少し気になったけど、馬場も既に料理を食べているので、箸を取った。

それにしても、何か緊張する…

こうやって女の子の親と食事をとるなんて滅多に…いや、聡美とは何度かあったんだけど、他の人とはないだろう。

普段は家では気にしない食事のマナーを注意深く行っているし、和俊さんにビールを注いであげたりしている。

その緊張の所為か、俺はいつもより食べる速さが遅くなっていた。

馬場も、カチコチに緊張してあまり食べられていない。

「あ、あの…ハンバーグ、おいしいです…！」

「ありがとう。まだあるからね。」

「お前は緊張しすぎ…

…あれ？」

気になっていた藤林の方を見てみると、皿の上にはまだ多くのメニューが残っているのに箸がぴたりと止まっていた。

緊張…してるわけではなさそうだ。

浮かない顔をしているし、目線は下に落ちている。

考え込んで、悩んでいる様だ。

「藤林？何かあったの？
何か思い悩んでるみたいだけど…」

「えっ？いや、その…」

遂に俺が訊いてみると、藤林は不意を突いた質問に少し慌てた。

そして俺を見つめると、俯いて、ゆっくりと話し始めた。

「実は…私の友達が、出かけてからまだ帰ってきてないんです。
それで心配してて…」

「友達？」

「あの公園で会うはずだった人です。
私は待ち合わせの時間に15分遅れてしまって公園に来たんですけど…その人はいなくて…
家に帰ってしまったのかと思ってさっき電話してみたんですけど、まだ帰ってきてないって言われたんです。
気にしすぎているのかもしれませんけど、私、何だか嫌な予感がして…」

「あら、俊太郎くん？」

「うん…」

俊太郎。

藤林が初めて俺を見た時に間違えて呼んだ名前…

君付けで呼んでいない事から、俊太郎は藤林にとって親しい人という事がわかる。

藤林がこんなに心配しているんだから、藤林とその俊太郎という人との間には深い関係と時間があるとわかった。

俺は時計を見てから、藤林を励まそうと少し笑って言った。

「大丈夫だって、そう気を落とすなよ。
まだ7時だぞ。ちょっとどこかに遊びに行ってるだけだって。
しばらくしたら、きっと家に帰ってるよ。」

「えっ、う、うん…」

そう言うと、藤林はきょとんとした顔をして俺を見た。
俺は何かマズい事を言ったかなと思い、ちょっと焦る。
いや、大丈夫だよな…普通の事だよな…
普通に励ましただけだよな…

「そうですよね。
きっと、私の気の所為ですよね…
考え過ぎですよね…」

藤林は少し安心したようで、作り笑いを俺に見せてハンバーグを口に運んだ。

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――

俺は電気を消す。

隣で寝ている馬場は、もういびきをかいて寝てしまっている。

まったくこいつは…

よくこんな状態の時に満足に寝れるよな。

女の事を考えてたし、本当に困ったやつだ。

心の裏ではこの出来事をどう思っているかわからないけど、

何だか少し、お前が羨ましく思えてくるよ。

俺は溜め息をついて、敷いた布団に潜る。

今日は色々な事があって疲れていて、俺は布団に潜ると体の力が抜けてぼーっと惚けて天井を眺めていた。

「知らない天井…」

そうだ…

この天井も、藤林も、この出来事も全部夢だ。

きっと俺のマンガの読みすぎの所為で変な夢を見ているんだ。

次に目が覚めた時は、いつものように聡美が怒鳴っている。

聡美と一緒に登校して、昼休みは馬場とパンを巡って走る、いつもの日常が戻っている。

…藤林の言ってた俊太郎って人も帰ってきて、全ての問題は解決だ。

うんうん、夢だ。

こんな不思議な出来事は夢に決まってる。

そう思って俺は寝ることにした。

次の日を期待して―。

藤林の涙

「……起きて…起きて…」

また、今日も声がする。

もう日常と化した声が聞こえ、自分の体を揺すって覚醒を促している。

俺を起こしている人が誰かかはもうわかっている。

またいつも通りの、幼なじみの聡美だ。

それにしても、もう朝なのか…

まだ眠いな…

9月だって言うのに春みたいに暖かくて頭がぼーっとしている。

それに昨日はあまり眠れなかったっけ。

「ん〜…もう少し寝かせてくれ聡美…」

そういう訳で、俺は布団を頭まで被る。
いつも通り、二度寝のパターンだ。

「あっ、ダメです。
早く起きないとダメになりますよ、自分が。」

あれ…何かがおかしい…

段々明確になってきた声は普段と違う喋り方をしている。
それに…何だか俺を揺する手つきがいつもより優しいような…

「あれ…聡美、今頃なんで丁寧語なんだよ…」

「何言ってるんですか、私は美郷ですよ。」

「え…」

俺は目を擦ってもう一度聡美と思っていた人を見る。

すると確かにその人は聡美ではなくて美郷…いや、藤林　美郷さんだった。

「うわぁあ！え…何で？！」

「何でって、ここは私が住む家ですよ。
私がいて当然です。」

「え……」

そうか…夢じゃなかったのか…

俺が今いる場所は俺の家じゃなくて、全く知らない場所にある藤林の家なんだ。

海に落ちた後、何故か公園にいてそれから…

「朝ご飯はもうできているので食べてください。
私は学校に行ってきます。」

「あぁ、うん…」

藤林がドアを閉めて出ていき、部屋は静かになる。

いつもならまた布団を被り、二度寝するのだろうが、いつもと違う朝の状態に目が覚めてしまい、しばらくぼーっと惚けていた。

これからどうしようか…

昨日は夢と思って現実逃避してたから
今日の予定なんて考えてなかったな…

隣の布団を見てみると馬場が寝ている。

猫が寝ているように、子供が寝ているように
ニヤけながらぐーすか寝ている。

仕様がない、起こすか。

面倒臭いけど今はこいつが必要だ。

この”世界”で一人は嫌だし。

「おーい。起きろ馬場。」

「う〜ん…もう食べれない〜」

古典的な寝言ほざきやがって…

「ほら起きろよ馬場。
すっげー可愛い子が図書館でお前のこと探してたぞ。」

「マジかっYO！今すぐ行くYO〜！」

バビューン！

「…早い。ちゃんと身だしなみ整えて出ていった…」

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――

「ねぇねぇ、そのすっごい可愛い子はどこにいんの？」

「あぁ、あれ嘘。」

「はいぃ〜（╹□╹；）？！」

いいな、この起こし方。
馬場を起こす時は次からこう言って起こそう。

「それより今は現実を見ろよ。
俺たちは今、情報が必要なんだよ。
まずここがどこなのかを調べなきゃいけないよね？
それに図書館では静かにね。」

「う…」

これだけ圧力をかけるとさすがに馬場は文句を言わずに黙りこんだ。

それから俺たちは図書館の本をかき集め、
それをひたすら読んで調べたりもしたし、
インターネットの環境もあってそれを使って調べたりもした。

そうやって俺たちは、一日かけてこの場所がどこなのか、どういう
世界なのかを知ろうとした。

…そして図書館で一日かけて調べた結果。

この世界は、例えて言うなら、童話では竜宮城、映画では千と千〇の神隠しのあの温泉屋、単純に言うと俺たちは今、「異界」にいるという事らしい。

つまり俺たちは神隠しにあったのだ。
浦島太郎、千、となってしまったのだ。

これは夢ではない、現実だ。

今はこのファンタジーを受け入れるしかない。
受け入れるしかないんだー！」

俺は今、こいつを図書館に連れてきて後悔している。

一人になってもいいから放っておくべきだった。

こんな静かな環境に連れてくるべきではなかった。

だから席を少し離れよう。

俺はこいつの何でもない赤の他人ってことにしよう。

「おいっ！引くな澤村！」

「お前…もっと静かにしろ。

ここは図書館なんだぞ。」

「この衝撃を静める事ができるかよ。
どうやって家に帰ればいいんだよ！」

「それを調べる為にここに来てるんだろ。
とりあえず落ち着け。」

とりあえず…俺が集中すればこいつも静かになるだろう。

馬場はまた騒いでいてうるさいが、放置Ｐだ。

思い出してみると、浦島太郎の話では、亀に乗られて元の海岸に戻ってきた。

千は例の温泉屋からトンネルを通って元の場所に戻ってきた。

そうだ、元の場所に戻れれば現実世界に帰れるという事は童話でも映画でも共通している。

俺たちもあの公園に戻れば現実世界に戻れるという訳なのだ。

「馬場、やっぱりあの公園に行ってみよう。

そうすれば戻れるかもしれない。」

「あの日の出公園が出口、ってことか…

そうかもしれないけど、公園がこの世界との出入り口だとしたら神隠しに会う人が多くなるはずだろ。

この町で人がよく失踪するなんて話は聞いたか？」

「確かに…話は藤林に聞かないとわからないけど、ないかも。」

一応、馬場は真面目に考えてはいるようだ。

何だかいつもよりずっと真剣だ。

いつもふざけておちゃらけている馬場とは思えないくらいだ。

当たり前か、こんな状況だもんな。

俺たちはその後も本を持って来ては読み、馬場が騒げば黙らせ、図書館の閉館時間まで調査を進めた。

閉館時間が来ても五冊ほど図書館から借りて藤林の家で読み調べていた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「頂きま～す。」

「どんどん食べてください。」

とりあえず今日一日の調査結果を整理すると、俺たちは今、「異界」の上総園上総町という場所にいる。

異界からの脱出方法はまだはっきりしていない。

俺たちのいた現実世界とほとんど変わらない平和な場所だ。

現在では車が道路を走り、航空機が飛ぶ。

昔には戦争をして敗れている。

国の名前は「本丸」という国だけど変な妖怪とかいないし日本となんら変わりもない。

このカレーも普通においしい。

藤林の家族も普通に…

「って、あれ？藤林はいないんですか？」

藤林の両親は苦し紛れに笑う。

俺は昨日の事を思い出し、まさかと思った。

「…俊太郎さんですか？」

両親は頷いた。

俊太郎さんがまだ戻っていなくて藤林が食事を食べられないほど心配しているのだ。

俺は両親が頷くと同時に「神隠し」という単語が俺の頭に思い浮かんだ。

俊太郎は、俺たちと同じように「神隠し」に遭ったのかもしれないと考えた。

「お母さん。俺、美郷さんを慰めてきます。」

「…お願いします、澤村さん。」

俺は食卓を立って藤林の部屋に向かう。

まずは、残念な事実を知らせなければならない。

俊太郎はもしかしたら、神隠しに遭ったのかもしれないという事、このままでは帰ってこれないかもしれないという事。

だから次に、俺が俊太郎をこの世界に帰してやるという事、藤林を俊太郎と会わせてやるという事を伝えようと考えながら、部屋への階段を昇った。

俺は少し緊張しながらドアをノックして藤林の部屋のドアを開ける。

「俊太郎?!」

「…残念だけど、俺だよ。」

藤林は窓の前に立っていた。

目は既に涙目になっていて、今にも泣き出しそうな表情をしていた。

「俊太郎さん…帰ってないんだな…」

返事はない。しかし俺は話を続ける。

「昨日、公園で待ってた人は俊太郎さんだよね？」

「…はい。」

やっぱりな、と思うと同時に残念な気持ちになる。

もう俊太郎という人は帰ってくるのが難しいという事になる。

俺は事実を伝える事が辛く感ぜられた。

藤林に鋭利なナイフを突きつけるようなものだからだ。

でも隠す事はできない、伝えなければ…

「俊太郎さんは…俺たちと同じように、

不思議な出来事に会ってるかもしれない。」

藤林はもうその事実を予期していたのか、何も反応せずに窓を見ている。

「俺たちと同じように神隠しに会って別世界に落ちたかもしれない。」

「…詳しく、教えてくれる？」

藤林は比較的冷静にこちらを向いて尋ねた。

しかし途端に目から涙が一粒、肌を伝う。

話しにくいが、俺は藤林に全て話すつもりだった。

今、俺ができる事をしてやるつもりだった。

そして、俺は口を開いて喋り始める。

「今日、図書館に行って調べてきたんだ。
俺たちに一体何が起こったのか、ここがどこなのかをね。
それで、それがわかった。ここが異界っていう場所だって。
俺たちは神隠しに遭ったんだって。
だからもし本当に俊太郎さんが神隠しに会ったなら、
逆に俺たちの住む世界に落ちたという事になる。」

「どうすれば戻ってこられるの…？」

「方法は１つ、俺たちが偶然通って来てしまった扉を通るんだ。
海沿いの道のある場所からその扉に向かって落ちるんだ。
でも、俊太郎がその扉を見つけられるかはわからないよ。
俺たちもこの世界での扉を見つけられないんだから。」

「…うっ、俊太郎…」

藤林はポロポロと大粒の涙を溢している。

そして手の平で顔を覆うと、遂に床に泣き崩れてしまった。

本当の事を言わない方がよかったのかもしれない。

何とか言い訳を作って、隠し通せばよかったのかもしれない。

俺は今更少し後悔したが、やはり言うべきだった。

その方がこれからの為だった。

俺は藤林に歩み寄ってしゃがみ、肩を持って言った。

「大丈夫、まだ二度と会えなくなった訳じゃないじゃないか。
死んだ訳じゃないし、まだ手は残ってるんだ。
俺が自分の世界に帰る方法を見つけて俊太郎をこの世界に戻せばいい。
だから、藤林は心配しなくていいんだ。」

「…澤村さん。本当、ですか？
信じても、いいんですか…？」

藤林は涙を流しながら顔を上げ、俺の顔を見つめる。
俺は優しく笑ってやって答えてやった。

「難しいけど、頑張ってみる。
自分の為でもあるけど、藤林の為に頑張るよ。
だから藤林は俊太郎の帰りを待ってやってほしい。」

「…うっ、澤村さん…俊太郎…」

そうして藤林はしばらく俺の胸を借りて泣いた。
しばらく泣いて咽び続けていたので俺は肩を持って慰めてあげた。

こうして肩を持っていると涙の匂いと一緒に藤林の、女性らしい良い匂いがしてくる。

でもこの感覚はなんだろう…

前に嗅いだ事のある懐かしい匂いだ…

俺はこの匂いを少し不思議に思ったが、その時の俺はよく考えることができなかった。

藤林が自分の胸で泣いているのだから。

――――――――――――――――――――――――――――

次の日の朝。

目を覚ますと、俺の顔を覗きこんでいる藤林がいきなり目に入ってきた。

藤林の顔は結構近くにあって、じっくり見られている事が本当なら

すぐにわかってしまう距離にあった。

そして藤林と俺は数秒間見つめ合う。

藤林はまだ目が覚めてると気付いていなかったのか、じっくり見つめ合う。

「きゃ…きゃぁー！」

やがて目が覚めてると気付いたのか、藤林は照れながら急いで離れる。

俺は寝惚けまなこを擦りながらゆっくり体を起こす。

しかし少し頭が覚醒してくると、藤林のドアップの顔を思い出して顔が赤くなっていってしまった。

なんで…藤林があんなに近くに…？

いや、なんで藤林はあんなに近づいていたんだ…？！

「あ…ご、ごめんね…いや、ごめんなさい…

少し、言っておきたい事があってですね…その…」

顔を真っ赤にする藤林は慌てながら言う。
俺も顔を赤くしながらゆっくり頷いた。

「き、昨日はありがとうございました。
落ち込んでた私を、慰めてくれて…」

あ、あぁ、その事か…

藤林が俊太郎が帰ってこれない事実を知って、
俺の胸に泣きついた事だ。

「お礼なんていらないよ。
俺が藤林の力になりたいって思ってやった事だし。」

「でも、私は感謝しているんです。
澤村さんが慰めてくれなかったら、私は今日も落ち込んで寝ていました。
本当にありがとうございます。」

そう言って、藤林はぺこりとお辞儀した。

「うん…どういたしまして。」

「はい。」

笑って答えると藤林は笑顔を浮かべた。

普段見せているような屈託のない笑顔よりもっと優しい笑顔。

「藤林は今日も学校だろ？
遅れるとマズいから早く行ってきなよ。」

「はい。
あっ、でも澤村さん。」

何か言い残した事があるのか、立ち上がっていた藤林がドアの前で立ち止まった。

「私も、澤村さんが落ち込んだり悩んだりした時は、頭を撫でて慰めてあげますから、私を頼ってくださいね。」

へぇ…それは楽しみだな…

藤林に頭を撫でて慰めてもらえたら、落ち込んだ気持ちなんてどこかに行ってしまうに違いない。

「うん、わかったよ。」

「はい。じゃあ、行ってきますね。」

「いってらっしゃい。」

そうして藤林は部屋を出ていった。

一人になって気付いてみると、何だか変に心が温かくなっている事に気づいた。

多分だけど、藤林のあの笑顔のお陰だろう。

藤林のあの優しい笑顔を向けられて心が温かくなったんだろう。

俺はその笑顔を思い出して少し笑った。

そして朝ごはんを食べて出掛ける支度をしようと部屋を出た。

もちろん、藤林に俊太郎を会わす為にも図書館へ行くからだった。

馬場との友情

図書館に行く前に、俺は馬場を連れて日の出公園に寄った。

公園は一昨日に俺たちが眠りから覚めた時と何の変わりはなく、滑り台、鉄棒、ジャングルジム、そして展望台があった。

植えられている木は風に揺られて葉が音を立て、空では雲が流れ、登り始めた太陽がさんさんと公園を照らしている。

やっぱり、展望台があるぐらいでどこにもありそうなただの公園だった。

「ここに戻ってきても、ここから元の世界に帰れるとは思えないな。って…話はどうだって？」

この町で、よく人が失踪するかどうかの話だ。

「藤林のお母さんから少し話を聞いてみたけど、やっぱりこの町には人がいなくなるとか、神隠しに遭うとか、そういう噂とか言い伝えはないらしい。
むしろ過去に失踪したって人は
俊太郎さんぐらいだよ。」

馬場は黙って話を聞いている。

「公園に人はあまり来ないらしいけどな。
昼に集まる親子たちぐらいだと。」

「…ふうん。」

元の世界への入り口はやっぱりこの公園じゃない。
となると、唯一の手掛かりは違うという事になり、いきなり迷宮入りとなる。
まぁ、最初からすぐには元の世界に帰れないと予想してたけど、これからどうしたら帰れるのだろう。
図書館でひたすら調査をしたら、帰る方法の手掛かり見つかるのだろうか。

馬場は珍しくも黙っている。
いつもは騒いでいてうるさいのだが、この状況じゃさすがに馬場も落ち込んでしまうのか。
そうだよな。いきなり知らない世界に放り出されて、目を塞がれるように未来を真っ暗にされたら落ち込むよな。

俺はまだ、藤林に慰めてもらうほど落ち込んではいないけど。

「俺たちの世界に帰るのは、絶望的だな。」

馬場の言葉に、俺は目を伏せる。

「誰に聞いても異界からの出口なんて知ってるはずもない。
浦島太郎や千も童話や映画の話、俺たちに起こった事は現実だ。
こっちからは一方通行で出口がないって事も有り得るんだ。」

「そうかもしれない…
でもそうとはまだ決まってないだろ。
帰れない可能性もあるけど、帰れる可能性もあるんだ。
だけど諦めたら可能性はゼロだ。
俺たちの世界に帰る為に、今は努力しなきゃいけない。
そうだろう？」

馬場は再び黙りこんだ。

今まで見せた事のない表情をしながら公園を眺めている。

とりあえず…調べる気はあるようだ。

怒りの感情もだけど、俺は馬場の目から努力の決意を感じ取れた。

それからというもの一ヶ月。

俺たちは毎日図書館に通い、本を机に持ってきて読んでは戻し持ってきて読んでは戻し、を無限に繰り返した。

図書館の常連になり、気付けば貸出し数が百を越え、本の虫になってしまっていた。

しかし、いくら調べても調べても自分たちの居た場所に帰る方法が見つかる気配がない。

完全に迷宮にはまってしまったようで、その行為は俺たちの気力だけを削り取っていった。

馬場はその調査を続けていくに連れてどんどん暗くなり、苛立ちを見せるようになっていた。

本をひたすら読み続け、調べていくという地道な作業によってストレスが溜っていた。

そして、藤林の家で図書館から借りた本を調べている時、それは起きた。

「本当に見付かんのかよ…」

「なんだよ…馬場…」

馬場は床に座り、壁に寄りかかったまま呟いた。

「もう一ヶ月だ！
一ヶ月毎日本を読んで探し続けてまだ手掛かりが見付かってない！
こんなに探してんのに！何で見付からないんだよ！」

馬場は借りた本を壁に投げて叫ぶ。

俺は真面目な顔をしながら馬場を見ていた。

馬場の溜った鬱憤を聞いていた。

「いきなり勝手に見た事も聞いた事もない世界に落とされて、その所為で俺達が帰る方法探さなきゃいけなくなって…
こんな不幸があるかぁ！」

ドン！と拳を壁に叩き付ける。

その音は多分、家中の人に聞かれただろう。
しかし馬場はもう限界だった。
我慢ができなかった。

馬場の気持ちはわかる。
俺も実際、イライラしていたと思うし、不安に思っていた。
本当に帰れるのだろうかと。
そして、気付くと俺たちは全く笑わなくなっていた。
テレビのバラエティ番組を見ても、ゲームをしても、笑うことがなくなっていた。

「馬場…気持ちはわかる。
でも家の壁や図書館の本に当たるな。どっちもお前のでも俺のでもない。」

「く…」

馬場は歯を噛み締めた。
顔を落としているが、腹が立っている様子はよく感じ取れる。

少しは気を静めたが、まだ何か言いたそうだ。

「澤村…お前、このまま調べ続けて帰れると思うか？俺たちの世界に。」

「わからない…」

「このまま先の見えない事をずっと調べ続けるのかよ…俺たち…」

俺は俯いて黙った。

確かに俺たちは答えのないものを探し続けているのかもしれない。

調査を続けたって無駄な事なのかもしれない。

でも俺はこの前、元の世界に帰る理由をもう一つ作ってしまった。

大きくて大事な理由だ。

だから俺は探し続ける。

自分から諦める事はせず、ずっと探し続ける。

しかし馬場は、この様子だともう限界かもしれない。
馬場にもそれなりの理由があるのだろうけど、でも―。
「……諦めるのか？」
馬場は伏せていた顔を上げて俺を見る。
俺は馬場の決意の固さを試していた。
ここで、馬場は調査から抜けるかもしれない。
でも俺はそれでも構わない。
「…俺が諦めたら、お前はどうするんだ？」
「俺は一人でも頑張っていくつもりだよ。
自分が帰りたいってのもあるけど、今はもうそれだけじゃない。
藤林の為でもあるんだ。」
「藤林の為？」
俺は俯いたまま頷く。

「俺は藤林と約束したんだ。
俊太郎をこの異界に帰して、藤林と再会させるって。
だからもう自分の為だけじゃなくなってるんだ。
お前が諦めたとしても俺は調べ続けるよ。」

「……」

馬場は再び頭を落とす。

もう言いたい事はなくなったようで大人しくなり、それからはずっと黙っていた。

時計を見ると１１時を過ぎていた。

馬場はともかく、俺は明日も早く起きる。

俺は馬場が投げた本を綺麗にして机にまとめながら言った。

「俺はもう寝るよ、馬場。
明日も早いからね。
疲れたなら寝た方がいいぞ。」

馬場は黙ったまま頷く。

俺は押し入れから布団を出して畳に敷いた。

仕様がないので馬場の布団も敷いてやり、そして紐を引っ張って灯りを消して布団に潜り込んだ。

馬場が布団に入ったかは知らない。

これからどうしようと知らない。

何だか気まずい空気になってしまったが俺は気にせず、何も考えずに目を閉じた。

次の日の朝、７時。

目覚ましを止めて体を起こすと馬場は既に起きていて、窓の前に立って何やら外を眺めていた。

俺がおはようと挨拶すると、窓を向いたままだが、ちゃんとおはようと返してくれた。

俺は静かに立ち上がって居間に下りようと扉を開ける。

すると藤林がちょうど廊下を通るところだったようで、藤林がドアの前に立っていた。

「キャ…さ、澤村さん…」

「藤林…」

偶然会っただけなのに派手に驚かされてしまった。

何となく気まずくて、少し沈黙が流れる。

「あ…すいません。

おはようございます澤村さん。」

「あぁ、おはようございます…」

藤林は窓の方の馬場にも笑いながら挨拶をする。

落ち込んだ馬場も藤林の笑顔には少し顔が緩むが、すぐに元の顔に戻ってしまった。

これは…重体だ…

女の子にあまり興味を示さない馬場なんて、まともじゃない。

猫が魚を見ても、構わず寝ているくらいの事だ。

「…馬場、下で飯食ってるから。」

「…あぁ。」

馬場は窓を向いたまま答えので、俺は藤林と一緒に居間に下りた。

朝食がもうできていたのですぐに食卓に座って食べ始めるが、藤林と俺はしばらく何も話をしなかった。

藤林は何かを考えているようで黙っていたし、俺も今は誰かと話す気分ではなかったし、二人黙って黙々と朝食を食べていた。

そして藤林が沈黙を破った時は、俺の朝食が残り少ない時だった。

「澤村さん。」

「何？」

「…昨日の話、聞きました。」

「え…？」

思わず朝食を食べる手を止めてしまう。

「昨日、大きい音がしたので気になって澤村さん達の部屋の前まで来てみたんです。それで…」

「…」

何を言われるのだろうか。

馬場が壁を殴った事についてだろうか。

うるさくて眠れなかった、という苦情についてだろうか。

「澤村さん、馬場さんも、最初に会った時からほとんど笑わなくなりました…」

「藤林の所為じゃないよ。」

「でも昨日、澤村さんはもう自分の為だけじゃないって言っていました。

私の為でもあるんだって…」

澤村は再びぴたりと手を止めた。
確かに言った。
俺は藤林と俊太郎を再会させる為にも頑張っている、と。

聞かれたのは失敗だったな…
藤林はきっと、俺を止めようとするに違いない。

そうなっては困る。
俺は藤林が止めても調査を続けるつもりだ。
でもそうなると、藤林の言うことを聞かないで無視しているようになり、図書館に行きづらくなってしまう。

「大丈夫…俺に任せてていい。
ごちそうさま。」

「澤村さん！」

俺は急いで立ち上がり、身支度を済まして逃げるようにして家を出た。

藤林は自分の所為で俺を苦しめてしまってると思うだろう。
でも調査を諦めて下さいとお願いされる事だけは避けたい。
俺のためにも、藤林のためにも。

そして今日も俺は図書館に向かった。

馬場には一応先に行くと言っておいたがもう来ないだろう。
あいつはもう精神的に限界だった。
図書館でずっと慣れない読書、自分の世界に帰れない悲しみ、色々なものがあいつの負担になっていた。
でも俺は馬場が居ようと居まいと関係ない。
藤林の為にも自分の為にも、調査を続けるのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――

閉館時間が近付いてきた。
図書館にいる人は少しずつ帰り始めて少なくなってきている。

外の方を見てみると太陽はもう沈み、秋の空はすっかり暗くなっている。

俺は読んでいた本を閉じて十冊の本をカウンターに持って行き、貸出し手続きを済ませてその本を鞄に詰めた。

外に出ると、冬が近い事を感じさせるような風が吹いていた。

俺の体に寒さを感じさせて通っていく。

俺は早く藤林の家に帰って暖まろうと足を走らせた。

夕食もできているだろう時間だし、急がなきゃいけない。

…結局、馬場は来なかったな…

諦めた、となると明日からも俺は一人か。

そう考えるとやっぱり少し寂しいものだな。

この一ヶ月、ほとんど馬場と一緒に行動してきた訳だし、異界に落ちてからの心配や悩みはあいつのお陰で少しは解消されていたのかもしれない。

そう考えると俺は新たな不安を感じてきた。

この先の不安や寂しさなどに堪えられるだろうか、と。

やっぱり、馬場にはまだ頑張ってほしい。

寂しいじゃないか、もう少し頑張って一緒に調査をしようよ。

そう思っていた。

『おい。』

「え…馬場…？」

「何が『え…』だよ。女みたいな反応すんなよ、気持ち悪いな。」

馬場は図書館の前で待っていた。

寒いのか、ポケットに手を入れながら。

「何でここにいんの？

諦めたんじゃなかったのか？」

「諦めたくねーよ。
俺は向こうにやり残した事が沢山あってな。」

馬場はくっくっと笑いながら言った。

それは作り笑いとかじゃなく、よく見せていた笑顔だ。

俺はずっと見てなかった所為で、こんな風に笑う馬場は懐かしく感じた。

元の世界の匂いを感じさせるほどに。

「今日一日使って考えたんだ。
それで決めた。やっぱりもっと頑張ってみる。
お前が頑張って調べてんのに、俺が諦めちゃ悪いからな。
今日は休んだけど、明日からはまた俺も一緒だ。」

「…そうか。」

そして俺も連られて笑ってしまう。

元の世界で笑っていたように。

そうか…馬場はまだ、頑張ってくれるのか…

よかった…よかった…

俺たちは笑って話をしながら藤林の家に歩いていった。

俺たちが住んでいた世界の話、聡美の話、ゲームの話、昼休み開催のパン争奪レースの話、そんな懐かしい話をして俺たちは笑いあった。

こんなに笑ったのは本当に久しぶりの事で、やっぱり馬場と居ると楽しかった。

そうだよな。俺たちは長年の友じゃないか。

元の世界でよく遊んだ友達じゃないか。

俺はそう思い、笑い合いながら住宅街の帰り道を歩いていった。

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――

「澤村さん、馬場さん、話があります。」

家に帰るとすぐに藤林が話しかけてきた。
あっ…すっかり忘れてた。
あの件についてか…

「まぁ…二人とも座ってください。」

「え、えーっと…
でもちょっと部屋に用事が…」

「大丈夫ですよ澤村さん。
調査を諦めて下さいなんて言いませんよ。」

「な…」

考えてる事がバレてる？
藤林ってエスパーだったのか？

まぁとりあえず、藤林がこう言ってるので俺たちは訝しみながらも
机の前に座って聞く事にした。

「諦めて下さいとは言いませんが、朝と同じ話です。

澤村さん達は最近笑顔がない、という事です。
それは精神的にも肉体的にも疲れているからだと思います。
それは私の所為でもあるんです。
私の為にも頑張っているって、昨日言ってましたし…
だから…」

「だから…？」

「私と一緒に、学校に通いませんか？」

「学校？」

ちょっと意外だった。今、その単語が出てくるとは。

藤林は話を続ける。

「学校に行けば楽しい思い出も作れて気分転換にもなります。
学校の人達はみんないい人ですし、私と同じクラスにしてもらいますから…どうでしょうか？」

「どうでしょうかって聞かれても…」

馬場を反応を見ようと横を向くと、何故か真面目に、そしてアゴをさすってダンディに考え事をしている馬場がいた。

真剣に、本気で考えている。

「う～ん、藤林さん…」

「はい、何でしょうか？」

「クラスには、藤林さん以外にも可愛い子はいるのだろうか？」

あぁ…こんな間抜けな質問をする馬場も懐かしい…

女の子に何て質問しやがるんだ…

見ろ、藤林が困ってるじゃないか。

いや待て、「藤林以外に『も』」？！

さりげなく口説いてんじゃねぇよ！

例え馬場でも張り倒すぞ！

「い…いると思います…よ？」

「じゃあ行く！（満面の笑みで）」

アホな馬場も帰って来ました…

ただ嬉しい事に、藤林は自分が間接的に可愛いと言われている事には気付いていないようだ。

ふっ、ざまみろ馬場。

「澤村さんはどうしますか？」

「えっ？あぁ、俺は…」

その時、俺は藤林と馬場が一緒に登校する様子を想像してしまった。

藤林と馬場が手を繋ぎ、笑いながらスキップしている様子を。

そうして、無性に腹が立った。

殺意が湧くぐらい馬場に怒りを感じた。

「行くよ…こいつは俺が見張ってないと、何するかわからないからね。」

馬場は俺の殺気を感じ取ったのか、少しも俺の言葉に突っ込まなかった。

むしろ悪感を感じて縮こまっている。

「じゃあ決まりですね！
来週までに教科書や道具を揃えて、それから学校に通い始めましょう。
私の両親にはもう話をしてあるので、澤村さん達は心配しなくていいです。」

…というわけで、俺たちは藤林の通う学校に通い始める事になった。
幼なじみの俊太郎がいなくなってそれほど寂しかったのか、俺たちが行くと決めた途端に藤林の顔は輝いた。

藤林にはそれほど大事に想う人がいるとわかって、俺は少し残念に思った。

でも、この世界に連れ戻す人はそれほどの人じゃないと頑張った甲

斐がないか、と少し笑った。

TO BE CONTINUED-

新しい学校生活

しかしまぁ、よくもこう簡単に編入できたと思う。

本当なら編入試験というものに四苦八苦するはずなのに、なんと藤林の通う学校は、町の唯一の学校という理由で編入試験がないらしい。

そう、この町、上総町は過疎化が進んできて子供が少ない町だった。家が建っていても老人が住んでいるのだった。

そんな訳で俺たちはこの上総高等学校に試験なしで編入し、今は教室の前にいる。

マンガやドラマでよく見る、クラスメイトとの対面、を経験しようとしていた。

「それでは入ってきて下さい。」

俺たちは先生の合図で扉を開け、緊張しながら教卓まで歩き、皆の方を向いた。

すると教室にいる全員が俺たちを見ていて少し弱気になるが、まず

は俺から自己紹介する。

「澤村　俊助です。金川から来ました。」

神奈川ならずの金川は実際にこの世界にある。
俺たちの世界で北海道に位置する場所に。

「俺は馬場　琢磨です。
澤村くんとは、同じ学校でした。」

馬場も、緊張した声で皆の顔を見ないように上を向いて自己紹介する。

らしくないな。
君付けで俺を呼ぶなんてやっぱり緊張してる。

そして、最後に二人でよろしくお願いします、とぺこりとお辞儀した。

実は自己紹介は、事前に練習していたりする。

緊張して動けなかったりするし、念のためと練習していたのだ。

そして結果は、角度は約４５度、自己紹介も噛んでいない。

何とかこなせたみたいだ。

傾けた体を元に戻すと、クラスはひそひそと話を始めた。
良いように話をしているか悪いように話をしているか、聞き取る事はできないけど何となく心配…

「じゃあみんな、仲良くするように。
二人とも席について。」

席は転入生なので窓側で最後の方だった。
あいうえお順で俺は後から二番目、
馬場は一番後となった。

朝礼が終わって馬場の方を見てみる。
すると馬場は緊張が解けてきたのか、笑みを浮かべながらうんうんと頷いていた。
きっとクラスメイトの女の子の事を見ていたのだろう。

「お前の頭にはそれしかねぇのかよ。」

「何言ってんだよ。
転入生って言ったら可愛いかどうか気になるもんだろ？
女子の立場から考えたら、カッコいいかどうかとかさ。」

「それは俺たちが迎える側だったらだろ！」

何かもう、この前までの馬場と別人のようだ…

あの時の馬場は真面目にものを考えていて、俺も見直していたのに…

「澤村さん馬場さん。
どうですか？良い学校でしょ？」

「藤林、その質問はコイツにすべきだ。」

「サイコーです！」

「そうですか！良かったです。」

何故コイツがサイコーと言ってるか知らない藤林。

あぁ健気だね、健気だね。

『美郷、この二人が例の？』

俺たちが話していたところにショートカットで陽気に笑う女子がやってきた。

きっと藤林の友達だろう。

藤林はどうやら学校で俺たちの事を話していたらしい。

どこまで話したかは知らないけど。

「うん。この人達が遠い親戚で、今は家に泊まってる人達。」

「ふ～ん、同棲してる人達ねぇ」

「同棲じゃなくて同居だよ。」

「同棲じゃなくて同居だ。」

藤林とハモった。

「あはは、面白いね二人とも。

私、五十嵐（いがらし）　栄子（えいこ）。よろしく～」

「はい、よろしくお願いします」

あっ、藤林にしたみたいにまたウィンクしてる。

馬場のやつ、五十嵐さんも口説くつもりなんだろうか。

相変わらず計り知れない野郎だ。

でも俺たちは笑い合って話していた。

初対面の五十嵐とも関わらず楽しく喋っていた。

それは何だかとても懐かしく感じられた。

学校でこんな風に話すのって、久しぶりだもんな。

約一ヶ月って期間だけど、大変な事がありすぎて本当に懐かしく感じてしまう。

考えてみれば、藤林の言う通り、俺たちにはこんなちょっとした日常が必要だったのかもしれない。

こんな何気ない日常に戻り、気分転換する事が必要だったのかもしれない。

そう思うと、藤林に感謝しないといけないな。

その事に藤林は気付き、また俺たちを助けてくれたんだ。

藤林は良い子だ。

天使みたいな優しい女の子だ。

俺の事を気遣い、力になれるように支えてくれる。

そんな藤林に、俺はきっとこの時から惹かれていたんだろう。

この時の俺はまだ全然気付いていなかったのだが、段々と俺の中に藤林が住み始めていたのだった。

そして、この学校の午前の授業が終わって昼休みが始まると、俺たちは藤林と五十嵐に学校を案内してもらった。

藤林のお母さんが作ってくれた弁当を藤林と五十嵐と一緒に食べ、教室を出たのだった。

学校は過疎化が進んだ町と言っても町唯一の学校なので生徒は並々に多かった。

みんな廊下を走ったり、笑い合ったりして騒いでいる。

それにしても、学ランは初めて着てみたけど結構窮屈なんだな。

濃いグレーの学ランってマンガとかに出てきて少し憧れてたけど、一度着てみたら案外普通なんだな。

いや、別に学ランに何か期待してた訳じゃないけど。

女子の紺のブレザーはよく藤林に似合っていた。

首元のリボンと胸元の校章は地味さを逸脱して、何だか可愛らしかった。

最初に会った時はこの服だったけど、家での藤林はほとんど部屋着を着ていたのでいつもと違う藤林を見られた。

「ねぇ、澤村くん。」

「えっ、なに…？」

そんな事を考えながら歩いていると、五十嵐がにやにやしながら訊いてきた。

「美郷のこと、どう思ってるの？」

「な…なんでそんな事を訊くんだよ…」

前を歩いていた藤林は恥ずかしそうに俺を見る。

「だって、美郷をずっと見てるんだもん。」

「な…」

「え…」

五十嵐のやつ、なんて事言うんだ…

まぁ…確かに、俺は藤林を見ていたかもしれないけど…

「ち、違うぞ藤林！

別に…その…あの…」

「は、はい…」

な、何か誤魔化せるものは、誤魔化せるものは…！

「えと、そ、そうだ！
藤林の背中にゴミがついてたんだ！」

「ホ、ホントですか…？」

藤林は慌てて背中に手を伸ばしてゴミを払おうとする。

五十嵐と馬場はと言うと、俺たちのやり取りをずっとにやにや笑っていた。

こいつら…何のつもりか知らんがいつか絶対仕返しをしてやろう。

「あっ！もうこんな時間ですよ澤村さん！」

「えっ？」

何となく気まずくなったところに（俺と藤林だけだが）、藤林が思いついたように言った。

「次は体育ですよ？

急がないと授業に遅れちゃいます！」

「あっ、そ、そうか…急がないと！」

俺たち二人は教室に走り始める。

遅れて馬場と五十嵐も、まだにやにやしながら着いてきた。

くそぅ、覚えとけ二人とも…

「おらー！ちんたら走るな転入生ー！
その調子だと２０分越えるぞ！」

そして５限目。

俺たちは校庭を走らされていた。

持久走の授業で１００ｍの校庭を４０周を、つまり４キロ走らされていた。

俺たちの元々の学校では２キロ走っていて、しかも帰宅部だったので、俺たちには４キロはきつい。

帰宅部の人達でももう慣れたのか、ほとんどの生徒が前を走っていた。

運動部の生徒に至っては何周も抜かされていて、この授業は精神的にも痛い。

学校は山の坂に建てられていて、西には森が広がっていて反対側には住宅街が小さく見える。

景色がいいからゆっくりと眺めていたいんだけど、先生は当然許さないだろう。

ていうか体育の先生っていうと、どの世界でもマッチョで恐いもんなのだろうか。

あの先生は、モミアゲが長くて鼻の穴が大きくてまるでゴリラみたいだ。

「ラスト一周！飛ばせー！」

「ひいぃぃ！」

そして、２０分２７秒。

最後に頑張ってスパートをかけてもこのタイム。
帰宅部の連中でもどちらかと言うと悪い方で、運動部のタイムとは比べ物にならない。

「はぁ、はぁ、体力落ちたかな…」

「中学の時は、運動部だったのにね…」

何度も息をしながら歩き、水道の蛇口を捻ると、水を頭を下にしてがぶ飲みした。
ついでに顔も洗って汗を洗い流す。

『ほら澤村、タオル。』

顔を洗い終えると、いつの間に横に居たのか、知らない男子生徒がタオルを渡してきた。
短い髪が逆だっていて、クールな男子。
そういえば、教室で顔を見たような気がする。

「ありがとう…」

俺は少し戸惑いながら礼を言い、渡されたタオルで顔を拭く。
初めて話すので気まずいが、こうして話しかけてきてくれたという事は、俺と友達になりたいという事なのだろうか。

「校庭走り終わったら卓球だよ。
あんまりちんたらしてたら”キングコング”がうるさいぜ？」

そう言って歩いて行くクールな男子生徒。
ちょっと素直じゃないけど…良いやつみたいだ。
俺はふふんと笑って、まだゼーハー言ってる馬場を引っ張ってその青年に駆けて行った。

「ねぇ、”キングコング”って、もしかしてあの体育教師？」

「ん？あぁそうだよ。」

「やっぱゴリラだよなぁ！
モミアゲ長くて尻アゴで！」

俺が笑いながら話すと男も笑って言う。

「そうそう、ゴリラみたいで鬼のように恐いからキングコングなんだ。」

そうして二人してわっはっはと笑った。

引っ張ってきた馬場はまだゼーハー言っていたけど。

「朝に自己紹介した通り、俺は澤村　俊助だよ。そっちは？」

「葛城（かつらぎ）　卓人（たくと）。

席は廊下側の後から3番目だよ。」

何だか親切でいい人だなぁ。

ちょっと素直じゃないけどクールでカッコ良い。

とりあえず今日だけで、二人の人と仲良くなれたみたいだぞ！

この学校生活でかなり良いスタートなんじゃないか？

「タオル、ありがとう。
タオル持ってきてなかったから助かったよ。」

「あぁ…」

「なんか葛城って優しいんだなー。
タオル渡してくれたり転入生の俺たちの為に話しかけてくれたり…」

『いや、勘違いするな。
俺はただ、お前たちといると女子と仲良くなれるかもしれないと思って近付いただけだ。』

「……はっ…？」

「聞こえなかったか？
俺はお前達といると、女子と仲良くなれるかもしれないと思って近付いたんだ。」

……前言撤回。

親切じゃないし仲良くなれてませんでした。

ていうかこの性欲丸出しの性格…

正にまだゼーハー言ってる馬場みたいじゃないか。

「いいか。これから俺はお前たちと仲良くしてやる。

卓球も一緒にやってやる。

だが忘れるな。これは俺の、未来の、理想の彼女の為なんだ…！」

「……（あんぐり）」

次の時間から、俺たちは女子に話しかけられなくなった。

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――――――――――

「……葛城。」

「何だ、五十嵐。」

「何しにここに来てるの？」

「澤村たちと居る為だ。」

「…居てて楽しそうにしてるとは思えないんだけど。」

「…そうか。」

葛城は、あれからずっと俺たちの席に来るようになった。
授業が終わるとこちらにきて俺の机の上に座る。
無言で座る。

知り合ったばかりだからまだ話す話題もないし…
それに、葛城は何だか不機嫌にしていて、そんな葛城の相手をしている五十嵐も苛立ち見せ始めて…
とにかく、空気が酷く重くて苦しくて、正直言うと、迷惑だ…。

なんで俺の席で喧嘩が起こりそうになってるんだ？
原因はなんなんだ？全く検討もつかない。

ていうか、転入初日にこんな状況に陥ってる転入生ってかなり珍しいのでは？
いや、この世界では有り得るのか？
この世界では普通なのか？！

「葛城、席を外してくれない？
私達は澤村くんと話をしたいの。」

苛立ち始めた五十嵐は容赦なく葛城に言い放った。

「そうか、悪いな。でも動かん。」

五十嵐は眉間にしわを寄せて何故葛城が動かないかを考えている。
その奥で困った顔をしている藤林。
馬場も俺の隣であわあわと慌ててた。

なんだ？何で葛城はそんなに不機嫌そうに黙ってるんだ？
俺たちに何か関係する事か？
俺たちが何か葛城にしたのか？

「澤村くん。澤村くんは席を盗られて何も感じないの？」

「う～ん…」

そんな事言われてもなぁ…

今、思う事は何でここに座っているのかっていう疑問だけだし…

とにかく…葛城が何か示唆したい事でもあるのか訊いてみるか。

「葛城。何か言いたい事があるなら、回りくどい事しないで言葉で示せよ。

五十嵐も怒ってるじゃないか。」

「……それができたら苦労しない。」

「…」

できないって…言えない事って

、一体どんなことなんだろう。

俺は気になったが結局最後まで葛城は訳を話さず、先生が教卓に立ったので、五十嵐も諦めて不満そうに席に戻って行った。

もしかして、明日も葛城は俺の机の上に座られるのだろうか。

藤林と五十嵐との話を妨げて五十嵐と喧嘩するのだろうか。

転校初日から困ったもんだ。
友達ができないとかじゃなくて、何だか変な事で困ってしまったものだ。

「なーんなんだろうな、あれ。」
「葛城さんですか？」

放課後。藤林と馬場の二人と一緒の帰り道。

朝に上って日ノ出台高校に登校した坂を、今度は下りて下校する。
太陽が水平線に近付き、オレンジに染まった空を眺めながら俺は尋ねた。

これじゃあ、日ノ出台高校ならずの日ノ入台高校だな。

「葛城っていつもああなのか？」

「いや、いつもは自分の席で友達と話していたと思いますけど…

なんだか今日は、不機嫌というか、拗ねたような感じでした。」

拗ねた感じ、というと、葛城はいつもとは違う感じなのか。

それよりも何故拗ねているのか、気になるな…

「あぁ、澤村さん。話は変わりますけど、これからまた図書館に行くつもりなんですか？」

「んっ？あぁ、そうだよ。」

「なら私も行かせてください。
私も調査をしたいんです。」

「えっ？」

藤林の顔を見ると、こちらを見て微笑んでいた。

何でかよくわからないけど、楽しそうに。

「で、でも藤林がそんな事する必要ないんじゃないの？」

馬場は驚きながら言った。

「いや、ありますよ。
私は俊太郎を探したいですから、澤村さんばかりに苦労かける訳にはいけませんよ。」

「う～ん、そうだな…」

馬場は確かにそうだな、と頷く。

でも俺は、俊太郎という名前を聞いた瞬間、俺は心に、何か嫌なものが広がって行くのを感じた。

あれ…何だコレ…

今まで感じた事のないものだ。

胸焼けでもしたのかな…

「いいんじゃない？
人手は多い方がいいし、藤林も一緒に探そうよ。」

「う～ん、そうだな…反対する理由はないけど…」

「じゃあ決まりです！」

別に俺たちにとって都合の悪い事はないし、逆に人手が増えて好都合なのだが俺の心は何故か嫌がっていた。

理由はわからない。

感じた事のない感情が心にあったんだ。

初めてだからわからない、胸焼けのような感情が。

俺はその感情について黙って考えていた。

落ちかけようとしている夕日を見て、考えながら図書館に向かって行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6471p/

自分の生きる場所

2011年10月8日13時42分発行